



清華苑の施設紹介

グループホーム
清華苑ポートピア

グループホーム 清華苑ポートピアは、JR大久保駅から徒歩三分の位置に立地し、三階と四階に計十八名（ワンフロア九名）の方がご入居されています。

日中は、ご入居者同士で談笑されたり、作業活動に取り組み、食事の準備をされるなど、それぞれ自由な時間を過ごされています。

ご利用者の得意分野を活かし、お米を研ぐこと、洗濯物をたたむことなど、日常生活動作を継続して行い、身体機能維持

と共に認知症進行予防にも取り組んでいます。

スタッフとご利用者が家族の様な関係性の中、仲睦まじく過ごしています。ホームページに清華苑ポートピアの日常が掲載されています。ぜひご覧ください。

(管理者 岡本米美)



はな華
HanaHana
 社会福祉法人 三幸福社会
 清華苑 広報誌「はな華」

第8号
 2021年11月15日発行

Pick Up!
コロナ禍を
振り返る

コロナ禍が導いたある写真家との出会い

法人本部 統括部長 田村智之

昨年末、神戸新聞に掲載された当法人のシトラスリボンの取り組みの記事を見たという事で、写真家・ジャーナリストである小原一真さんより英ガーディアン紙の取材依頼がありました。

コロナの最前線で働く人たちの一人として当法人のスタッフインタビュー取材を受け、それからの縁で今回、小原さんが出品される「京都国際写真祭」の制作に法人として協力することになりました。

コロナ禍でご利用者の日常を懸命に守っているスタッフの姿、ご利用者の想いをぜひ世に伝えて頂きたいという思いがありました。その後当

法人が協力した「コロナ禍の看取り」に関する作品は京都・二条城に展示され、ミニシアター「出町座」で上映されました。小原さんのフィルタールを通じて作品を見られた方々の心の中に清華苑のいま、介護施設のいまが少しでも伝われば幸いです。



KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭 2021
 2021年9月18日(土) - 2021年10月17日(日)京都を舞台に開催される国際的な写真祭。小原さんの作品は、二条城会場に出品されました。

コロナ禍の

全ての死に

社会が向き合おうために

新型コロナウイルスが世界的な拡大を見せ始めた頃、私はずっと気になっていたことの一つが、情報の不均等でした。

介護施設でクラスター発生というニュースが報道された時、そこに映し出されるのは、施設の外観と感染者数などの数値だけでした。そこには、人の姿もなく、伝えられるのは、その状況だけ。人の気配を感じられない報道が一人歩きすることで、現場を含め様々な関係者を安易に傷つけてしまっただけのような恐れを感じていました。

また、コロナ感染による死ばかりに焦点が当たること、様々な制限下にある他の「コロナ禍の死」の実情が中々見えなくなっている気がしました。私は、それら見え

らくなってしまう先にある人々の言葉を聞きたいと強く感じていました。

そんな中、縁あって、清華苑に取材のご協力を頂けたことで、私は今、人の命に向き合う姿勢について学び始めました。感染下の制約で、出来ないことばかりが報道される中、しかし、その現場では、これまで積み重ねてきた大切にしなければいけないことをなんとか守ろうとする介護があることを知りました。

諦めてはいけない人の尊厳を守る行為を知りました。制約の中にある葛藤を知る中で、その葛藤を現場に任せっきりにしてしまっている社会があるのではないかと感じました。明日、どうなるか分からない入所者さんを前に、「何か起きたら、ほんまに後悔せえ

写真家 ジャーナリスト

小原一真



インタビューを受ける岩西副施設長
 Photo_Kazuma Obara



特別養護老人ホーム 清華苑の仏間 夢殿
 Photo_Kazuma Obara



インタビューを受ける鎌田介護リーダー
 Photo_Kazuma Obara

へんのかなって」と言った言葉が忘れられませんでした。

ここには書き切れない大切な言葉を聞く中で、私は、それらの言葉が、社会で共有されていったとき、日本社会として、「コロナ禍の全ての死に、社会が真剣に向き合っていくための土台のようなものが作られていくのではないかと感じています。



Kazuma Obara

小原一真
 ●1985年岩手県生まれ。写真家、ジャーナリスト。ロンドン芸術大学フォトジャーナリズム修士課程卒業。世界報道写真賞を受賞。災禍の中で見えなくなっていく個に焦点を当てた作品制作に精力的に取り組みながら、2020年には米ナショナルジオグラフィック協会より助成を受けて、コロナ禍の最前線で働く看護師・介護士による看取りの記録を続けている。



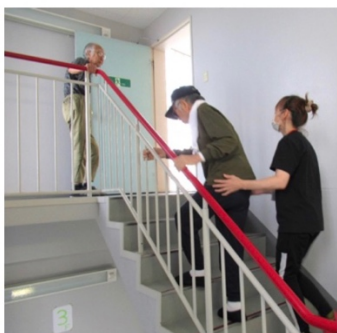
特別養護老人ホーム 清華苑
今年初めての秋まつりを開催しました。職員手作りの明石焼きや綿菓子、挽き立てコーヒー、駄菓子の千本引き、職員によるダンスなどを楽しんで頂きました。



老人保健施設 清華苑養力センター
入所やショートステイなどでご自宅から当苑に来られる方には抗原検査にご協力頂いております。新しくご利用される方、既存のご入所者、全ての皆さまの安全安心の為に！



ケアハウス 清華苑シルバーライフ
コロナにおける差別解消を狙いとした市民運動に賛同し、ご入居者と一緒にとスリポンプロジェクトを立ち上げました。たくさんのリボンと想いが地域に届く事を願って。



グループホーム 清華苑
コロナ禍の運動不足を解消する為に館内の階段を利用して筋力アップに取り組んでいます。あるご利用者は、1階から4階まで2往復もされる方もおられました！

コロナ禍を振り返る 各施設の 取り組み

コロナ禍で出来なかった事もたくさんありましたが、各施設では感染対策を徹底しつつ、知恵を絞り、様々な新たな取り組みを進めて参りました。その一部をご紹介します。



グループホーム 清華苑ポートピア
面会が難しい状況の為、広報誌にはなるべく多くご利用者の日常の写真を掲載しています。「いい顔していましたね。写真を撮って親戚にも送りました」とご家族も喜んでくださいました。



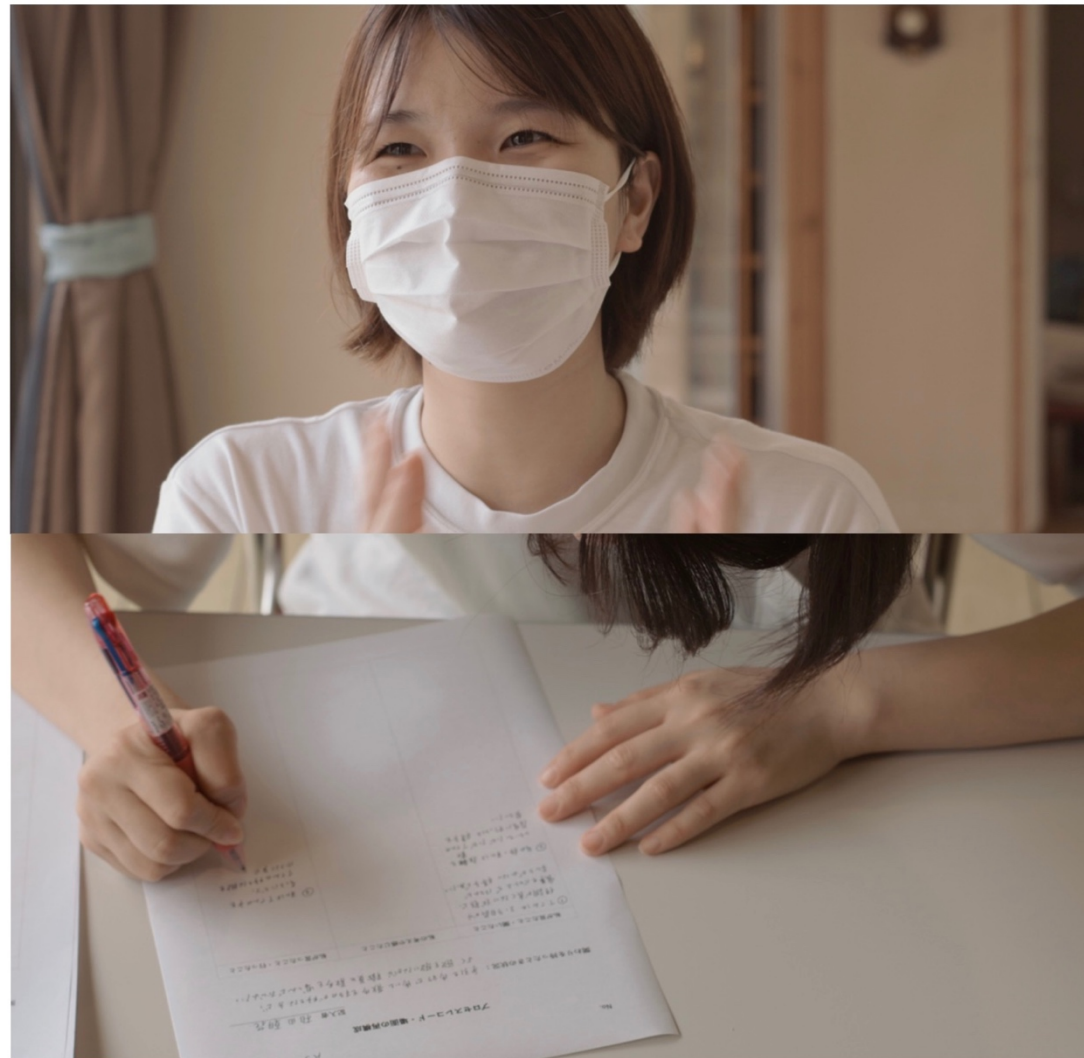
通所介護 清華苑デイサービスセンター
コロナ禍でも季節を感じて頂けるよう、園芸活動をはじめました。一緒に種まきやお花の水やりをしてすくすく成長！鑑賞後はドライフラワーにして楽しみました。



通所リハビリ 清華苑すいすい
昨年のクリスマスは苑からマスクケースをプレゼント。可愛いアレンジで“気分の上がるマスク生活”へ！マスクをしてもお洒落を忘れずに♪



小規模多機能型居宅介護 大久保苑
外出行事が実施できないため、苑内行事を大々させる事にしました。スイーツ作りは人気で、調理中のご利用者の皆様は姿は活き活きた表情がみられました。



インタビューを受ける柏田介護員 Photo_Kazuma Obara

穏やかな日常を 取り戻すまで

特別養護老人ホーム 清華苑 介護員
柏田朝花

この度、小原さんからのインタビューを受けてまず感じたことは、このコロナ禍の現状に慣れてしまっていたせいかインタビューを受けるまでコロナ前との差にあまり気づけていなかったということです。それほどコロナによる非日常が日常を覆いつくしているという事を実感しました。

今回のインタビューで私は、ケース担当をしていたご利用者のお話をさせて頂きました。コロナ禍でなければご利用者ご家族はなんのしがらみもなく面会する事が出来ていましたが、コロナの影響で面会禁止になり、止くなる直前まで面会することが出来ない時期がありました。これは当然起きていたのだと考えると本当に悔しい思いでいっぱいです。

これからもまだまだコロナと戦っていかねばならない状況は続くと思いますが、感染対策はもろんのご利用者様が日常を穏やかに過ごして頂けるよう毎日大切に頑張っています。

心温まるエピソード

懸けた情けは水に流し 受けた御恩は石に刻む

老人保健施設 清華苑養力センター
介護支援専門員 大中由宜

令和三年七月二十日、祖母が亡くなりました。私にとって小学校二年生のとき以来、近親者の死でした。

祖母は通所リハビリ清華苑すいすいを利用していました。

「あなたがおるとこ（清華苑すいすい）に来るのが一番楽しい。」

とよく言ってくれました。

介護保険サービスを利用するようになり、約四年。祖母の近くに住んでいましたが、あと何回会えるかわからない、何回一緒に食事ができるかわからない、と一日一日を大切に、少しでも御恩返しができるよう心掛けたつもりでした。それなのに。祖母が亡くなり、棺に入った祖母と対面したとき、一番抱いた感情は後悔でした。

「大好きだったおうどん、もつと一緒食べたかったな。」

「故郷の高松に連れて行ってあげればよかったな。」



清華苑すいすいの利用を始める前、いつ会っても祖母はピンク色で薄汚れた、雑巾みたいな割烹着を着ていました。夕方、訪ねると電気も付けずに真っ暗なリビングでテレビを観ていました。

振り返ると、認知症の始まりだったのだと思います。「どこか遠くに行ってしまう」、そんな不安から清華苑すいすいの利用を勧めました。清華苑すいすいに行くようになり、久しぶりに洋服を着る祖母に会いました。趣味だった社交ダンスでワルツを踊ることができました。

「懸けた情けは水に流し 受けた御恩は石に刻む」

これは、祖母に教えてもらった大切な言葉です。高齢者施設を利用するご利用者、その一人ひとりからの御恩を心の石に刻んだ方々、ご家族はご利用者の日々の生活の幸せを願い、私たちはその担い手です。



福祉サービスはご利用者本人だけでなく、ご利用者家族の支えになります。祖母に幸せな居場所を与えてくれたことに感謝しています。入職したときから今までずっと、福祉の仕事は私にとつての天職だと胸を張って言うことができます。

「大切な家族が清華苑を利用してよかった」

そう思っていただけのように自身の天職を通じてご支援ができればと考えています。

心温まるエピソード

私の大切な言葉「ゆっくり、ゆっくり、ゆっくり。」

老人保健施設 清華苑養力センター
介護員 柴田ありさ

「そこに愛はあるんか？」

私はこの言葉が大好きです。私は相手を大切に想っている行動、言動全てを愛と捉えています。何か迷った時、モヤモヤした時、行動や発言する前にこの言葉を自分に問いかけます。すると私の中の答えが見えてきます。

そして、もうひとつ大切な言葉があります。OJ担当者がいいつも私にかけてくださった、

「ゆっくりでいいよ。」

という言葉。この言葉をかけてくれた背景には沢山の出来事がありました。この言葉を聞くと、緊張や焦り、モヤモヤした気持ちをほぐし、肩の力が抜け、平常心に戻してくれます。

OJ期間が終わり、独り立ちした今でも焦ったり不安になった時、きつと先輩ならゆっくりでいいよと声をかけてくださると思い、頭の中でゆっくり、ゆっくり。とおまじないうのように言い聞かせます。

何年経ってもこの言葉に私は助けられるのだと思います。

そしてこの言葉に救われたのは私だけではありません。

ご利用者は日々忙しい私たちに気を使っている時があるかもしれませんが、何かをする時、

「ゆっくりで大丈夫ですよ。焦らずゆっくりしてくださいね。」

と声をかけます。

「忙しいのありがとだね。」などご利用者は言ってくさいます。するとリラックスして、スムーズにボタンをかけることができたり、自分でスポンを下ろすことができた。私はOJ担当者からゆっくりでいいよという言葉の力を学びました。

そして職員だけでなくご利用者、友人や家族、困っている人がいたらこの魔法の言葉をかけた。

肩の力がすっと抜けますようにと願いを込めて。

「ゆっくり、ゆっくり。」

